

Title	高揚-幻滅の型 : 『聖アグネス祭前夜』に二つの評価をもたらすもの
Author(s)	村井, 美代子
Citation	Osaka Literary Review. 30 P.34-P.46
Issue Date	1991-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25486">https://doi.org/10.18910/25486</a>
DOI	10.18910/25486
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 高揚——幻滅の型

—『聖アグネス祭前夜』に二つの評価をもたらすもの—

村井美代子

聖アグネスは、4世紀初頭ディオクレティアヌス帝のキリスト教迫害のもとで異教徒の夫を強いられ拒絶し、13才で火あぶりになったローマの少女である。キーツの『聖アグネス祭前夜』は、処女の守護聖人聖アグネスの聖日前夜にあたる1月20日の夜、娘に未来の夫が啓示されるという中世以来の伝説を利用している。この夜、夫を夢占いするマデラインの館へ彼女を愛するポーフィリオが忍び込み、二人は結ばれ嵐の中へ去って行く。

今世紀の殆どの批評家は、二人が結ばれる場面と館から逃げ出す結末に意味づけを行なっている。60年代ごろまでは主に夢と現実の二項対立が読まれた。「形而上的批評家」<sup>1)</sup>らは、二人が結ばれて夢と現実が融合し、キーツの理想が実現されるとするが、<sup>2)</sup>二人に夢と現実の最終的な対立、夢の破綻を捉え、結末に悲劇を見る批評家も多い。<sup>3)</sup>70年代以降はフェミニズム批評の流れを受け、無力な女マデラインがポーフィリオに犯されて仕方なくついて行くのだと解釈されたり、二人が去る結末にキーツの生きた時代の不安の反映が指摘されもしている。<sup>4)</sup>このように二人の関係の解釈は様々だが、ロミオとジュリエットにも例えられる若い恋が描かれ、しかも二人の死に終わるのではなく、ポーフィリオ自身荒野の向こうにある今後の住処にまで言及しているにもかかわらず、結末をハッピー・エンドと見る批評家は少なく、殆どが不安感や悲劇性を指摘している。

一方19世紀の批評家は、物語の展開や二人の関係より、館を彩るゴシック小説のような舞台背景、詩全体のイメージの美しさ、豊かさ、緊密感を専ら評価し、絵やステンドグラスや宝石にこの詩を例えていた。<sup>5)</sup>

本論では『聖アグネス祭前夜』をめぐって、安定感、統一美と不穏感、

unhappy-ending 感という相反する評価を何が生み出すのか、キーツの想像力展開のプロセスと関わらせて考察し、詩全体の様々なレベルを高揚—幻滅のパターンが支配して安定感を醸し出す一方、結末にこのパターンが当てはまらず永遠に幻滅が訪れないこと、つまり結末が、幻滅を大前提とした彼の想像力の特質と相容れないことが一因となっている点を見ていきたい。

## I

マデラインとポーフィリオの関係や結末だけに注目するのではなく、前世紀の批評家に倣って詩全体を見て、結びつけられることの多い二人の行動を別々にたどると共通のパターンが浮かぶ。それは1月20日の夜の数時間の枠の中、真夜中に向けての高揚とそこからの醒めである。伝説の言付けに忠実に従うマデライン、愛する女への思いと自身の肉体の欲望に忠実なポーフィリオ、館の上空を運行する月、階下の宴、さらに一篇の詩としてのこの作品自体も同じパターンをたどる。

マデラインが初めて現れるのは聖アグネス祭前夜の宴が始まった広間である。彼女は老婆達から聞いた今夜の夢占いで既に心ここにあらぬ体である [“her heart was elsewhere” (l. 62) ]。<sup>6)</sup> 次第に夜が更けて夢を見られる真夜中が近づくに従い、彼女の思いも激しく高まる。

She danced along with vague, regardless eyes,  
Anxious her lips, her breathing quick and short.  
The hallowed hour was near at hand. She sighs

.....  
Hoodwinked with fairy fancy—all amorn,  
Save to St. Agnes and her lambs unshorn,  
And all the bliss to be before tomorrow morn. (ll. 64-72)

迷信に取り憑かれて現実も見えない (“hoodwinked”) マデラインは寝室へもどり、ドレスを脱ぎ始め、目醒めたまま早くも夢を見る [“Pensive awhile

she dreams awake, and sees, / In fancy, fair St. Agnes in her bed," (ll. 232-233)]. やがて彼女は眠り、宵からの望みを叶える。だが彼女の夢は、真夜中過ぎる頃ポーフィリオによって破られる。

Her eyes were open, but she still beheld,  
Now wide awake, the vision of her sleep——  
There was a painful change, that nigh expelled  
The blisses of her dream so pure and deep. (ll. 298-301)

夢と現実の間を暫しさまよった後マデラインが見たものは、今夢見ていたのとは似ても似つかぬ男だった。すべて忘れて没頭していた聖アグネス祭前夜の夢が霧散したのを知った彼女は泣き始める。未婚の娘にとって特別な今夜は、ポーフィリオに会えた喜び以上に夢が消えた落胆の方が大きく、真夜中の夢の消滅と共に彼女の高揚した心も醒めてしまう。

マデラインがまだ広間にいる頃、ポーフィリオが登場する。彼はひたすらマデラインを思っているだけやって来る。

Meantime, across the moors,  
Had come young Porphyro, with heart on fire  
For Madeline. Beside the portal doors,  
Buttressed from moonlight, stands he and implores  
All saints to give him sight of Madeline  
But for one moment in the tedious hours,  
That he might gaze and worship all unseen;  
Perchance speak, kneel, touch, kiss——in sooth such things have  
been. (ll. 74-81)

彼が最初から肉体的にマデラインを求めていることは、「こっそり一目見たい」から“speak, kneel, touch, kiss——”と次第にエスカレートする言葉に自ずと表れている。館に侵入してマデラインの乳母アンジェラに会うポーフィリオは、彼女の寝室へ先回りすることを思いつき、それだけで激しく興奮する [“Sudden a thought came like a full-blown rose, / Flushing his brow, and in his pained heart / Made purple riot;” (ll. 136-138)]. 渡る

乳母を説得してマデラインの寝室に隠れた彼は、愛する女が髪を解き、宝石をはずし、ドレスを脱ぐ様を一部始終盗み見し、彼女が眠ったのを見届けると隠れ場所から出て目醒めさせる。そして「夢の男と違う」と非難されるが、思いを遂げるのに夢中な男の耳にはそれすら官能的に響く。

Beyond a mortal man impassioned far  
 At these voluptuous accents, he arose,  
 Ethereal, flushed, and like a throbbing star  
 Seen mid the sapphire heaven's deep repose;  
 Into her dream he melted, as the rose  
 Blendeth its odour with the violet,  
 Solution sweet. . . . (ll. 316-322)

宵からの望みが真夜中に叶えられ、マデラインと結ばれた直後ポーフィリオは「これは夢ではない」[“This is no dream,” (l. 326)]と彼女に語りかける。それは今まで思いを遂げるのに没頭していた彼自身を醒めさせる言葉でもある。彼はさらに“Arise—arise! The morning is at hand. . . Awake! Arise, my love, and fearless be!” (ll. 345-350)とマデラインを急がせる。「目醒めろ」「起きろ」と畳み掛け、ポーフィリオはまだ夢に未練を残すマデラインを醒めさせるが、高揚して恍惚境にあった彼自身の心も身体もまた、夜中を過ぎて急速に醒めつつある。

マデラインの寝室の下では聖アグネス祭前夜の宴が繰り広げられる。宴の準備が整っていく様は、冒頭で礼拝堂へ向かう祈禱僧が聞く音楽の響きとしてまず知らされる。やがて彼は静かな序曲を耳にし、暗く寒い屋外から明るく暖かな室内へと視点が移る。

That ancient Beadsman heard the prelude soft,  
 And so it chanced for many a door was wide  
 From hurry to and fro. Soon, up aloft,  
 The silver, snarling trumpets 'gan to chide;  
 The level chambers, ready with their pride,  
 Were glowing to receive a thousand guests; (ll. 28-33)

支度の整った広間に着飾った客が入場し、宴は次第に華やかに盛り上がっていく。そのさんざめきは、柱の陰に隠れるポーフィリオにも遠く聞こえてくる [“Behind a broad hall-pillar, far beyond / The sound of merriment and chorus bland.” (ll. 94-95)]。そしてマデラインの側へ忍んできた彼を飛び上がらせるほど騒々しく、真夜中を迎えた宴が最高潮に達する。

The boisterous, midnight, festive clarion,  
The kettle-drum and far-heard clarionet,  
Affray his ears, though but in dying tone ;  
The hall door shuts again, and all the noise is gone.

(ll. 258-261)

扉が閉まるのと共に聞こえなくなった喧噪は、以後二度と描かれない。夜中を過ぎて宴は終わった。賑やかに登場する客が冒頭で「幻の如く無数だ」 [“Numerous as shadows” (l. 39)] と形容されたように、華やかな宴が真夜中を境に一夜の幻の如く消え、客や門番の醜い酔潰れた姿だけが残る。

この館の上空では月が静かに運行する。月はポーフィリオの登場と共に現れる [“Beside the portal doors, / Buttressed from moonlight, stands he...” (ll. 76-77)]。彼はひとまず乳母の部屋に匿われるが、そこには月の光が射している。 [“He found him in a little moonlight room,” (l. 112)]。やがて彼はマデラインの寝室に潜み、何も知らない彼女が入ってくる。ここにも青白い月の光が射している [“Out went the taper as she hurried in; / Its little smoke, in pallid moonshine, died.” (ll. 199-200)]。真夜中が近づく頃、この部屋の窓のステンドグラスに月が射して、鮮やかな色彩をマデラインに投じる。

A casement high and triple-arched there was,  
.....

Full on this casement shone the wintry moon,  
And threw warm gules on Madeline’s fair breast  
As down she knelt for heaven’s grace and boon; (ll. 208-219)

マデラインが床に就いて夢を見る頃、皓々たる冬の月は高度を上げて高い窓一杯に光を投げかける。やがてポーフィリオが彼女の側へ忍び寄ると、月は再び仄暗くなり [“the faded moon / Made a dim, silver twilight,” (ll. 253-254)], 並んだ食器が鈍く光る [“The lustrous salvers in the moonlight gleam.” (l. 284)]. 高いステンドグラスに光を注いでいた月は次第に弱くなり、夜半に二人が結ばれた時には沈んであたりを闇が包む [“Solution sweet — meantime the frost-wind blows. . . St. Agnes’ moon hath set.” (ll. 322-324)]. 上空を運行しながら唐突に姿を消すワーズワースの月は、ルーシーの生死に関わっているかのような衝撃を「私」に与えたが、<sup>7)</sup> この聖アグネス祭前夜の月はポーフィリオの登場と共に現れ、マデラインの純潔を守るかのように見える。そして真夜中近くに高く明るくなって望みの夢をマデラインに見せるが、以後姿を消して彼女の夢は破られ、処女性は失われる。月もまた真夜中に向けて次第に高まり、夜半に高度を極めて使命を終えると、その神秘の力、処女を守り夢を見せる力を失って消えてしまう。

さらに一つの詩作品として見ても同じパターンがたどれる。一篇の詩として聖アグネス祭前夜の数時間を描いた最後の約20行で、創られてきた詩の世界、暫し読み手を引きこんでいた虚構 (illusion) の世界が希薄になる。それは詩の前半で、忍んできたポーフィリオに驚き、早く帰れと言う乳母の言葉 [“Alas me! Flit, / Flit like a ghost away!” (ll. 104-105)] に最後の二人の姿を予言するかのように示されている。警告にもかかわらず二人は結ばれ、館から逃げ出す。

Down the wide stairs a darkling way they found.  
 In all the house was heard no human sound;  
 A chain-drooped lamp was flickering by each door;  
 The arras, rich with horseman, hawk, and hound,  
 Fluttered in the besieging wind’s uproar;  
 And the long carpets rose along the gusty floor. (ll. 355-360)

仄暗い通路に吸い込まれた二人に代わって、ランプやタペストリーや絨毯が生き物の如く前面に出ると、広大な館全体が無人生化したようになる。やがて再び二人は、乳母が予言した姿となって現れる。

They glide, like phantoms, into the wide hall ;  
Like phantoms, to the iron porch they glide ;

.....  
By one, and one, the bolts full easy slide ;  
The chains lie silent on the footworn stones ;  
The key turns, and the door upon its hinges groans.

(ll. 361-369)

恋人達が“phantom”という実体の無い姿となり、戸外へ出る瞬間再び消え、門、鎖、鍵、扉などの無生物がひとりで動くように前面に出て、二人は去って行く [“And they are gone——aye, ages long ago / These lovers fled away into the storm.” (ll. 370-371)]. “glide,” “slide,” “lie,” “turn,” “groan”という現在形が、「去ってしまった」(“they are gone”)という現在完了形へ、そして「去った」(“fled away”)という過去形へと漸次変化して、既に希薄な二人の姿が一層遠のき、「はるか昔に」(“ages long ago”)によって、冒頭から無意識的に浸ってきた過去の枠が改めて強調される。そして中程で姿を消した乳母と、冒頭に現れただけの祈禱僧に最後の四行で性急な結末(死)が与えられる。聖アグネス祭の前夜が描かれた後、主人公二人の姿が希薄になり、過去の枠が強調され、老いた二人の命が奪われて、一時の illusion の世界が消えてしまう。

マデライン、ポーフィリオ、月、宴の4つが1月20日の夜の数時間の枠の中で、高揚・恍惚から醒め、illusionの消滅(disillusion)へ至るパターンをたどり、階下に宴、階上にマデラインとポーフィリオ、さらにその上に月の存在と空間的に整い、これを包む詩の枠も同じパターンをたどるため、全体から均整のとれた構成・展開の美が生じる。Holman Hunt や Arthur Hughes らラファエロ前派の画家は“The Eve of St. Agnes”のタイ



トルで絵を残しているが、同時代の批評家も一幅の絵としてこの詩を読んだ。彼らの見出した宝石やステンドグラスのように整った緊密な美しさは、ゴシック風イメージという漠然とした全体的印象だけでなく、パターンの統一性、重層性からも生じている。

## II

以上のような高揚から幻滅へ至るパターンは、数ヵ月後のオード、特に『ナイチンゲールに寄せるオード』の中で、一人称を用いてより鮮やかにダイナミックに現れるが、<sup>8)</sup> この二作品にはいくつか共通点がある。

『聖アグネス祭前夜』第1連に現れる祈禱僧の指は痺れて感覚を失っている (“Numb were the Beadsman’s fingers,”) が、オードの第1連も「私」の感覚の痺れ (“drowsy numbness”) や鈍り (“dull opiate”) で始まる。また1月20日の夕暮れから真夜中過ぎまでを描く『聖アグネス祭前夜』同様、オードではナイチンゲールの声を聞く「私」の一夜の [“this passing night” (l. 63)] 思いが描かれ、しかも一瞬「私」が死を願うほどの恍惚の頂点に達するのは真夜中である [“To cease upon the midnight with no pain,” (l. 56)]。さらに『聖アグネス祭前夜』全42連の真ん中、第21、22連で案内役の乳母が去り、マデラインとポーフィリオが二人きりになって次第に感情を高揚させていく。同様に、8連あるオードの第4連で「私」が既にナイチンゲールと共にいることが述べられ (“Already with thee!”)、続く第5、6連の恍惚へとつながる。

このような枠の中、オードでも同様に、ナイチンゲールとの一体化を望む「私」の現実からの一時的離脱(第1—3連)、恍惚(第4—6連)、“forlorn”をきっかけにした現実への回帰、醒め(第7—8連)が描かれるが、さかのぼればキーツの初期の詩の中にも、この幻滅へ至るパターンは遍在する。

The visions all are fled—the car is fled  
Into the light of heaven, and in their stead

A sense of real things comes doubly strong,  
 (“Sleep and Poetry,” ll. 155-157)

There, when new wonders ceased to float before  
 And thoughts of self came on, how crude and sore  
 The journey homeward to habitual self!

(*Endymion*, II, ll. 274-276)

これは“Negative Capability”<sup>9)</sup>によって対象と一体化し、想像力の世界を天翔けるキーツの想像界没入のプロセス、詩作のプロセスとも言えようし、<sup>10)</sup>彼の全作品を通じて様々な形で現れる詩の展開の基本的なパターンである。

Harold Bloom は、キーツの偉大さを彼が肉体感覚を賛美した点に認め、マデラインとポーフィリオを“completely physical in a physical world”と見ているが、<sup>11)</sup>ここでこの基本パターンは主人公二人の行為と極めて physical に結びついている。マデラインは迷信を信じ、未来の夫を夢見たいと純粋に願うが、寝室で老婆達の言付けを忠実に守る姿は非常に官能的である。

Of all its wreathed pearls her hair she frees;  
 Unclasps her warmed jewels one by one;  
 Loosens her fragrant bodice; by degrees  
 Her rich attire creeps rustling to her knees. (ll. 227-230)

心を高揚させ、髪をほどき、宝石ははずしてドレスを脱ぎ、ベッドに横たわるマデラインは、夢に現れる夫を待つ。恍惚状態 [“sort of wakeful swoon” (l. 236)] に陥って眠り、夢で彼女が夫の姿を単に見るだけではないことは、キーツが挿入する予定だった数行からも明らかである。<sup>12)</sup>マデラインは現実にはポーフィリオと結ばれるまでに夢で未来の夫と結ばれる。高揚——幻滅のパターンは、夢のその刹那に至るまでの精神的・肉体的な興奮、直後の醒め、脱力感に合う。

一方ポーフィリオの行動も physical にパターンと結びつく。彼は乳母にはマデラインの髪にすら触れないと誓う。[“Oh, may I ne'er find grace...

If one of her soft ringlets I displace," (ll. 146-148)]. だが彼は館へ侵入する前から、「話しかけ、ひざまずき、触れて、キスしたい」(l. 81) と願い、この欲望に駆られて夢中で前進し館の中へ、乳母の部屋へ、階上のマデラインの寝室へ、そして彼女の体内へ侵入する。官能的な高揚、興奮の後、束の間の恍惚から醒める彼は現実へ立ち返り、階下へ、館の外へと出る。想像力展開のプロセスが、ポーフィリオの肉体的欲望の展開を表している。

『聖アグネス祭前夜』は、単に似たパターンが重なって統一美を生んでいるだけでなく、そのパターンが想像界へ浸り、現実へもどるというキーツが「自身の脈で証明した」<sup>13)</sup> プロセスの変奏であり、しかも主人公二人の行動と抽象的にはなく、肉体的なレベルで結びついているため一層の安定感を生んでいる。

### III

この統一美・安定感を創造した後、キーツは愛する二人がどこへとも知れず去って行くという open-ending を用いて二人の姿を永遠化している。一篇の詩と見れば、二人の姿が希薄になって闇に消え、創られてきた詩の世界、一時の illusion の世界が消滅し、読み手の心を捉えて高揚させ、醒めさせるという例のパターンを詩自体がたどっていることになる。だが二人の行動を別々に見るのではなく、愛し合う恋人たちの行為、感情として追うと、そこにはマデラインが夢から醒め、ポーフィリオが思いを遂げ、月が沈み、宴が終わり、詩が終わることに見られた幻滅 (illusion の消滅) が存在しない。一度醒めを経た二人が求める相手と手をたずさえ、永遠に恍惚・高揚した心のままでいる。<sup>14)</sup> この闇へ消える二人の姿は、恍惚境へ誘うナイチンゲールと暫し一体化するものの、結局闇の中へ共に“fade away”してしまえないナイチンゲールのオードの最終連の「私」の姿と決定的に違う。

『レイミア』のリシウスや『つれなき美女』の騎士のように、キーツの

詩に様々に現れる高揚—幻滅のパターンは、必らず一抹の悲哀感、悲愴感を生む。だが、現実へもどること、illusionが解けることは彼の想像力の大前提でもある。<sup>15)</sup> それは『聖アグネス祭前夜』の前年の詩 (“Lines Written in the Highlands after a Visit to Burns’s Country”) に明らかである。ここでキーツはロバート・バーンズの生家を訪ねた後、この偉大な詩人を思い、暫し現実を離れて想像力の世界を天翔ける。

Scanty the hour and few the steps beyond the bourn of care,  
Beyond the sweet and bitter world—beyond it unaware;  
(“Lines Written in the Highlands,” ll. 29-30)

現実を越えて恍惚境へ至るのはごく容易い。が、すぐにこう続く。

Scanty the hour and few the steps, because a longer stay  
Would bar return, and make a man forget his mortal way.  
(*Ibid.*, ll. 31-32)

想像界に留まるのは、現実を忘れないために「ほんのわずかの時間、わずか数歩」でなければならない。永遠に想像界に留まり、高揚、恍惚のままいることは恐怖 (“horror”) である。

No, no, that horror cannot be, for at the cable’s length  
Man feels the gentle anchor pull and gladdens in its strength—  
(*Ibid.*, ll. 39-40)

九尋の海底から呪われた船を動かしたアホウドリの霊のように、<sup>16)</sup> 綱で結ばれた錨に支えられ引かれるため、永遠に想像界に留まることはなく、必らず懐かしい現実にもどってくる。逆に言えば、この錨綱がいっぱいに張るところまでは現実を離れて恍惚境に浸れることになる。キーツの詩の中で高揚—幻滅のパターンはしばしば悲愴感を伴うが、その底にはやがて現実にもどること、醒めることがしたたかな大前提となって常に存在している。それ故一層強力に想像界へ向かうことができる。醒めること、幻滅によって安定するという特質をキーツの想像力にはらんでいる。

愛し合い、一緒に暮らしたいと願う二人が、闇の中、嵐の中へ心を高揚

させたまま消える結末には、この大前提となる幻滅が存在しない。醒めることの不在が不安定感を生み、一応は恋愛が成就する詩でありながらハッピー・エンドと見られず、悲劇性や不安感が指摘されることになる。この不安定感、詩全体を支配するパターンの重層美が安定感を創りあげた後であるため、より強く浮かんでくる。

詩全体にちりばめられたゴシック風イメージに注目した前世紀の批評家は、その鮮やかさ、緊密感故に宝石やステンドグラスにこの詩を例えた。一方結末に注目する今世紀の批評家は、悲劇性、不安定感故に産業革命以降従来秩序が崩壊しつつある不安な時代の反映を見ている。橄欖石の如き<sup>17)</sup>硬質の統一された美と、それを突き崩すような不安定感、不穩感。一見相反する『聖アグネス祭前夜』へのこれら二つの評価は、印象批評から新批評、そしてフェミニズム、新歴史主義へという批評の変遷を反映しつつ、結局いずれもキーツの想像力の特質、高揚・恍惚・興奮から幻滅を経て初めて安定するという特質を衝いているといえる。

## 注

- 1) Jack Stillinger, *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems* (Chicago: University of Illinois Press, 1971), p. 69.
- 2) Cf. E. R. Wasserman, *The Finer Tone: Keats's Major Poems* (1953. Baltimore: Johns Hopkins, 1967), p. 97-137.
- 3) Cf. Herbert G. Wright, "Has Keats's *Eve of St. Agnes* a Tragic Ending?" *Modern Language Review*, XL (1945): 90-94.
- 4) Cf. Marjorie Levinson, *Keats's Life of Allegory* (Oxford: Basil Blackwell, 1988), pp. 96-179; Daniel P. Watkins, *Keats's Poetry and the Politics of the Imagination* (Madison: Fairleigh Dickinson University Press, 1989), pp. 63-84.
- 5) Leigh Hunt [*The Indicator*, XLIII (2 August 1820): 337-344] は "*The Eve of St. Agnes*, which is rather a picture than a story. . . ." と述べ、Alexander Smith [*Encyclopedia Britannica*, 8th edn. XIII (1857): 56-57] は "It [*The Eve of St. Agnes*] is rich in colour as the stained windows of a Gothic cathedral, and every verse bursts into picturesque and graceful fancies. . . ." と述べている。

- 6) 引用はすべて *The Poems of John Keats*, ed. Miriam Allott (London: Longman, 1980) に拠り、『聖アグネス祭前夜』からの引用は行数のみ示す。
- 7) William Wordsworth, “Strange Fits of Passion Have I Known.”
- 8) Allott [“‘Isabella,’ ‘The Eve of St. Agnes’ and ‘Lamia’” in *John Keats: a Reassessment*, ed. Kenneth Muir (Liverpool: Liverpool University Press, 1958), pp. 39-62] と Walter Jackson Bate [*John Keats* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963), pp. 445-446] は、この1819年の作品の多くに類似したパターンを認めている。
- 9) H. E. Rollins, ed. *The Letters of John Keats* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958), I, 45.
- 10) Allott [*The Poems of John Keats* (London: Longman, 1980), p. 524n.] は『ナイチンゲールに寄せるオード』について次のように述べている。“The poem traces the inception, nature and decline of the creative mood...”
- 11) Harold Bloom, *The Visionary Company* (1961. Ithaca: Cornell University Press, 1971), p. 379.
- 12) キーツは以下の一節を加える予定だった。  
 ‘Twas said her future lord would there appear  
 Offering as sacrifice—all in the dream—  
 Delicious food even to her lips brought near;  
 Viands and wine and fruit and sugar’d cream,  
 To touch her palate with the fine extreme  
 Of relish: then soft music heard; and then  
 More pleasures followed in a dizzy stream  
 Palpable almost: then to wake again  
 Warm in the virgin morn, no weeping Magdalen...
- 13) H. E. Rollins, ed. *op. cit.*, I, 80.
- 14) Cf. Dorothy Van Ghent, *Keats: The Myth of the Hero* (Princeton: Princeton University Press, 1983), pp. 103-104.
- 15) Jack Stillinger (*op. cit.*, p. 107) は『ナイチンゲールに寄せるオード』の結末部について次のように述べている。“He [Keats] does not seem sorry to return from the final emptiness that he has discovered to be ‘forlorn.’”
- 16) Samuel Taylor Coleridge, *The Rime of the Ancient Mariner*, ll. 373-380.
- 17) Alexander Smith (*op. cit.*, 57) は“a perfect chrysolite—a precious gem of art”と評した。